



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	釧路短期大学
Citation	高等継続教育研究, 2, 118-131
Issue Date	2003-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51809
Type	other
File Information	Kushirotanki-2.pdf



4 釧路短期大学

日 時 2002 年 7 月 30 日 10:30~12:30
場 所 釧路短期大学
話し手 坂田 澄雄 氏 (釧路短期大学教授)・西塔 正一 氏 (同教授)
高尾 雅子 氏 (同教授)・鳥居良四郎 氏 (同教授)
杉本 龍紀 氏 (同助教授)・芳賀みづえ氏 (同助教授)・滝澤 真毅 氏 (同助教授)
藤田 順平 氏 (学校法人緑ヶ岡学園事務局長)・岡崎 俊雄 氏 (釧路短期大学教務課長)
聞き手 姉崎・光本・相川・石山・上田敦・上田理・大嶋・金澤・川瀬・佐藤・白取・滝ヶ平・谷・
布上・平島・松浦



沿革、現状と今後

藤田 学園全体の今までの経緯と、現状の運営、それから今後の三つに分けてご説明します。

うちの学園は今 38 年目に突入しまして、平成 16 年に 40 年を迎えます。そう状況の中で、釧根の唯一の私学の高等機関として、短大、高校、情報専門学校、それから幼稚園、総合学園としての経営になっております。

学園と理念としましては、最初はキリスト教系の学校ということで成立しまして、今もなお学園の理念にそれが引きつづいております。それは「愛と奉仕」という形で、地域社会に貢献しうる人材育成、こういう基本的な理念、方針として、学園を運営しているという状況です。

法人の設立認可を 39 年の 1 月に決定いたしまして、同時に、釧路女子短期大学、同附属高等学校、二つの学校でスタートいたしました。昭和 40 年の 4 月に附属幼稚園が設立認可されております。大きく変わったところだけをご説明しておりますが、昭和 48 年には釧路女子短期大学から釧路短

期大学になりました。高校も同じでありまして、男女共学という形で昭和 48 年に変更をしております。昭和 49 年には短期大学に附属幼稚園教諭養成所を開設して、昭和 55 年に学科増設をいたしまして、釧路短期大幼児教育学科に移行しております。昭和 58 年 4 月には、生活科学科の専攻部分で食物栄養課程を組み入れております。平成元年には釧路情報処理専門学校、コンピューターの関係の学校を開設しまして、現在にいたっております。途中、釧路短期大学附属高等学校は平成 3 年に教育改革・財政改革含めまして、釧路緑ヶ岡高等学校に名称変更しております。皆様もご存知の方おられるかと思いますが、うちの高校の方は特にスポーツが得意としてございまして、アイスホッケー、スケートでは、これまで多くの国際的な選手を輩出しているという状況でございます。そういう中で今後の展開を進めていきたいと思っています。

理事長は今現在 5 代目の船井修一氏でございまして、学園の中で、いろいろと学校の創設なり改革を推進している現状でございます。先ほどもちょっと報告いたしましたが、その中で今後の少子化対策も含めまして、皆様もご存知のように私学の立場は、財政からも教育の面からも非常に厳しい状況に突入してございます。こういう中で、今お願いして、近々まとまるであろう短期大学の今後の方向性、これはまた年度内には理事会が協議をはかりまして、計画を練っています。

高校も同じでございまして、これは先ほども前段でお話しましたように、われわれ学園としましては、平成 16 年が開校 40 年でございますので、

それに向かいまして、学園の各部門——高校・短大・情報処理も含めまして——教育・財政面の再構築と改革をしていこうということで、それぞれの企画をお願いしているという状況でございます。

岡崎 今、事務局長の方から概略の話がありましたけれど、創立の段階、それから創立から 10 年くらいの間は、短期大学にはほとんど学生が入っていない、そういうような状況がありました。本学は入学定員が 100 人の小さい短期大学であります。入学定員がほぼ満たされるようになりましたのは開学 13 年後ということでございまして、12 年の間は、一番ひどいときは、開学初年度は 17 人の入学者、その後もっとひどいのは昭和 47、8 年は、14～5 人の入学者。そういうような状態でした。

その間、学校法人の理事長が 3 人、3 交代回っていますし、10 年間で学長が 4 人交代しております。そういうことで、その当時を知っているものは残念ながらこの席にはおりませんし、学園の中でもおりません。私どもも 30 年史を紐解きながら、こういうことであったのかな、ということで理解をしているところでございます。

よく聞いておりますのは、短期大学の創立は、当時北海道学芸大学の釧路分校がございまして昭和 37、8 年頃には二年課程の教員養成課程が廃止になるということがあったようでございます。そういう動きを受けまして、地元の有志の方々が中心になって、地元の女子の高等教育機関を存続したいということでこの学園を創設された。そのときに設立の世話人の中心的な役割をやった方が、キリスト教の信奉者でありまして、そちらの関係から資金が導入できるというような構想があったようです。あるいは行政からそれなりの資金援助が得られるという構想もあったようです。また民間の寄付が相当得られるというような構想があったようでございますが、結果的には寄付金の構想は全部実現できなかった。スタートの段階から非常に大変な状況でした。

キリスト教の関係者の方がそういう傾向のミッションスクールを立ち上げたいということで考えたようですから、当然、教育の理念なり建学の精神なりはキリストの教えをもとにということで、愛と奉仕の精神を軸に人材を育てようということで始まっておりました。途中いろいろ学則や寄附行為の変更がございまして、寄附行為の中にも、

あるいは学則の中にも、そういう表現は今に残ってはございません。学内でも、自己点検評価委員会で建学の精神あるいはそういうものの目標を議論しておりますが、残念ながら、結論を得られていないのが今の状況であります。

短期大学の中だけで建学の精神を変えるというわけにはいきませんので、短期大学としてはどこかの時点でこの問題を整理しなければこれから先へ進みがたい、進めないのではないか、という考えをもっております。これも、変えるべきだという意識の先生方も半数ぐらいおりますし、あるいは、いや特に変える必要はないんじゃないのかというような考えの先生方もいます。いずれにしても、建学の精神なり教育の理念なりそういうものに、こだわらなければなかなか方向転換はできないんじゃないかと、私としてはそういう押さえ方をしております。

姉崎 大学の設立にあたって北星のサポートがあったためにキリスト教の理念によったということもあったかと思いますが、カリキュラムの中を見ますと、初期にはそういうものがあったと思いますけれど、後になるとだんだんそういう点は明確に出ることはなくなり、今おっしゃいましたように、寄付金や寄附行為、それから学則からはそういう点は後退しているということですが、女子教育、女子の高等教育機関というのは、釧根地域、「根釧」と言ったりもするようですが...

岡崎 いや、我々は「釧根」と言って... (笑)。

地域の短期大学の理念と実情

姉崎 その中で唯一の高等教育機関ということで、そこから出発して後に男女共学に変わられる、その辺の、理念上の転換がどういうふうに行われたのか。もう少し教えていただけたらと思います。

それから、学生を集める上で初期に大変なご苦労をされて、学科増設をされて少し埋まってくるということとあわせて、社会的ニーズのとの関係で、司書であるとか、この大学の個性化といいましょうか、そういうものを出そうと、その後いろいろ努力されていると思いますが、学科編成の、あまり変わらずにおく部分と、社会の変化の中で多少変えていく部分、その辺のバランスといいましか、その辺で考えてこられたようなことがあったら、そのことをもう少しお話しいただけたらと、その 2 点をもう少しお願いします。



坂田 開学してから10年ほどは俗に言う家政学科というのは十数名の学生だったわけです。その当時我々は家政科としては基本的に食物をもっていなければだめだろうという発想がありまして、それで食物栄養専攻コースを設けたわけです。これは俗に言うマーケティングリサーチをしているわけじゃないんですよ。基本的な概念として、家政科というものには食物栄養が必要だろうという発想で設立したわけです。

短大というところはどちらかというと資格指向型という方が重視されているということで、その後、栄養士の免許、他に、先ほどおっしゃいました図書館司書も追加したという経緯がございます。図書館司書を追加したのはつい数年前です。それはなぜそうなったかと申しますと、家政科から生活科学科へ名称変更して生活科学科の中に栄養士免許が取れるコースを設けてあるんですけども、片方のコース、従来の家政科という組織だと極端に人が集まらないということがあったようです。食物栄養コースの方は大体20人とか25人来ているのに、片方はひどいときは応募ゼロということになりまして、そちらの方にテコ入れをしなければならぬということで、十数年前から、秘書士資格、それから図書館司書などの資格を付与できるようにしてやっている次第でございます。

坂田 先ほどのお話と関係するんですが、1学科では十分な人数が集まらないということで、その当時、幼児教育のほうがニーズが多かった、そういう経緯があったわけです。それで本来はいきなり学科増設をしたかったんですが、財政的な問題、教員の問題等々ありまして、まずは専修学校で出発しようということで、正式な名称が「釧路短期大学附属幼稚園教諭養成所」だったのかな、最初は。つまり、幼稚園教諭の免許を出す専修学校と

してスタートして、次の年には保育資格と、二つが授与できるというようにしたわけです。その専修学校が数年続いて、ある程度学生が来るという見通しが立ったものですから、いよいよ学科として増設した。そして現在に至っています。

姉崎 そうすると“試行期間”があって、ニーズが見込めたと。

坂田 “試行期間”というよりも、主に財政的、教員の二つの問題が多かったと思えます。

岡崎 幼児教育学科の前身の養成所を開設して3年後くらいにはほぼ定員の充足、という状況になりましたから、幼児教育学科を開設していなければどうなっていたかと思えます。

姉崎 幼稚園教諭と当時の保育養成というのは管轄が文部省と厚生省に分かれていて、二元化で、一つのところで二つ出すというのはなかなか難しかったというのは他の大学、短大でも聞いたりしているんですが、ここの場合はどうでしょうか。

坂田 先に幼稚園の免許を優先で出して、その次、というふうでした。

岡崎 開学して12、3年、なかなか学生が集められない、そういうことがすべてに影響しておりまして、設備もなかなか思うようにいきません。学生のためにもそうですし、先生方の研究の面での設備も非常に寂しいのが現状でございます。その後、昭和61年くらいから少し盛り返ってきます。特に平成に入りまして、第二次ベビーブームの世代のおかげでだいたい定員の50%増くらい入学したことが何年間もありまして、そこで少し財政的にゆとりができてきたんですけど、いかんせん“創業時からの累積債務”といいますか、こういうものをまず解消することが短期大学としての目標であります。

今年は定員を確保いたしましたけれども、後ほど入試委員会委員長からお話があるとは思いますが、私は先のことを考えると定員を確保するのは難しいのかなと思ったりもしていますけれど、今のところ、とにかく学生の教育の面でもそうですし、先生方の研究の面でも、何とか新規の設備投資ができないものか、だいたい9月いっぱいまでには、短期大学としての要望をまとめようということをやっています。

光本 先ほどの坂田先生のお話では、家政科から生活科学科への転換というのは学科自体の充実という側面のお話だったと思えますけれど、『30年史』

を読んでおりまして興味深かった点は、学科の名称変更をした直後にカリキュラムの改革の中で 7 つほどの「系」という授業科目のくくりを採用されて、その中で「地域文化」ですとか「地域社会」というような系で、特に「地域」という言葉を冠した授業科目ですとか、その系列化がされて、カリキュラムの中に地域ということがかなり強く位置づけられているという印象をもったんですが、最近はまだその辺が変わってきているようにも思いました。生活科学科の中では、「地域」ということを教育の一つのコアというんでしょうか、その考え方の中に取り入れていこうというお考えも当時あったのか、また最近ではどうなっているのかといったことをおうかがいできればと思います。

坂田 まず第一点目。学科の名称変更のときにかかわるカリキュラム変更をしたのは私ですので。確かに地域ということについて重要視して授業の編成をしたという経緯があります。その後、特に地域系として「郷土史研究」という名前の科目があったと思うんですが、そうしたものをあえて入れるということをしました。

光本 それは、教育内容として地域を重視しなければいけないという気運が当時の学科の中の議論として高まって…、

坂田 議論というよりも、後からお話があると思いますが、本学の学生の出身地をみますとだいたい 8 割程度が釧路市、あるいは管内からですね。そうするとどうしても地域を重視せざるをえないだろうということで、作りだしたカリキュラムということになるかと思います。その後、もちろん地域を軽視しているわけじゃありませんが、他の資格付与の科目がだいぶ増えてきます。そうすると時間的にキツキツになってくるということもありまして、地域という系列の科目は昔に比べるとすこし減るかというふうに思います。

光本 具体的には授業の中で何か工夫されていることがありますか。地域に出たりとか。あるいは地域の方々を呼び込んでとか。そういったようなこともなさっているのでしょうか。

坂田 地域の方を呼び込むというのは、定期的ではありませんが、臨時的にやっております。郷土史研究という点については、例えば釧路博物館の館長さんをお願いして、「釧路市の郷土」ということで授業に来てお話を願うというようなことをやっております。

光本 学生の方々の反応はどのようなのでしょうか。

坂田 苦しいですね (笑)。「郷土」と言うと、やっぱり古いって感じがするんじゃないかな。

光本 そういう語感が。

坂田 それから「風土」とか「地域」とかね。「田舎」とか、そういう響きを持つんじゃないでしょうかね。

光本 地域の価値を再発見したり、見直すという、そういう講義は簡単にはいきませんか。

姉崎 近年、「地域学」という形で総合的に、学際的な進め方をしてあらためて住んでいる地域を学生が別な視点で見て誇りに思うとか、ここで何とかしていこうというものを大学が媒介するということを、沖縄とか東北とか、いろいろなところでされていますね。昨日も公立大をうかがったら、学長先生が、釧路のもつ良さをもう少し広げることやろうという話をされていました。

坂田 「地域」ということをすごくよく使うんだけれど、そこに住んでる人間から見るとおもしろくないのかなと。私の感じですが。

学生の募集と就職先

姉崎 地域社会との連携や関係共同のところに移ってよろしいでしょうか。今、お話が少し出ましたけれど、学生の確保の問題について、近年いろんな大学が、リーフレットをつくったり、ホームページ上で工夫をしたり、説明会をやったり、もちろん従来のパンフレットなどをつくったりしているんですが、そういう意味で学生のリクルートについて、今お話をうかがいまして、釧路市あるいは管内が 8 割以上ということではあったにしても、学生をきちんと短大で確保しようとされている場合の工夫があったら、まずおうかがいできたと思います。併せて、その後の卒業後の職の確保についても。

杉本 学生募集のお話でございますね。今お話にありましたように、私どもの短大は定員 100 人で大体の傾向で言いますと釧路市内出身の高校、釧路市と、釧路町にもあるんですけど、その高校出身がだいたい 6 割から 7 割、釧路管内から通学の方をあわせると 8 割くらいになります。「縄張り」といいますか、根室管内は短期大学ございませんので、根室管内からの学生も含めると 85%くらいになりますね。ですから、自分も北大出身なんですけれども、関西弁が飛び交うなんてことは

全然なくて、まったく地元の人間だけです。

短期大学というと、それほど中身は変わりません。だいたい保育・福祉系と生活系、プラス教養系。その3つくらいだと思います。それで、学生募集活動ということでは、もちろん私どもの短大の特長というようなことは申し上げます。ただ、振り返って考えて見ましても、なかなかそういうのを抽出するのは難しいことですが、人数が少ないですから、これは私どもがしっかり生かすことができればそれなりにメリットになるかと思っています。結果的に少人数になったということもあるんですけれどね、少人数で綿密な学生に対する教育ができることだと思います。

もう一つは、やはりそういった入学者構造ですから、景気その他家計の問題でもございまして、自宅から通える、それから北海道の短期大学の中でもうちは比較的安い方かと思うんですが、ほんの数万の差なんです、そういった金銭的なこともあります。

釧路根室地方というのは、ある意味ではちょっと閉じられた地方、何となくそう思って、地元指向が強いです。一部、札幌に出たいというのがありますけれど。一方そんな大きな都会に出るのは怖いと、地元に残って考えるという方が、保護者の方も含めて多いようです。結局そうなってくると地元就職できるという保証はありませんけれど、全体的な数値ではそれなりに地元の就職が可能であるということを示したいなと思います。外に出られないという高校生の方は、毎年この釧路支庁管内で60~70人くらいはいるんだろうと思います。しかし、教育機会を提供するだけだと教育機関の責任を果たせないの、就職率の方を学生募集の段階では訴えてはいます。

ただ、僕もそうかもしれませんが、親の世代は正職員しか頭にありません。だから今ちょっとお話ありましたけれど、図書館司書でも嘱託とかいう形になりますね。正職員で図書館に入るには公務員試験をクリアして、その後、図書館に配属されるという非常に高いハードルがありまして、本当に図書館に行きたいと思うならば、むしろ最初から嘱託を望むという、そういったことが親の世代ではなかなか、なんだその立場はみたいな、そういう点で苦労することがあります。

それから後、こういう地域ですので、とにかくできるだけ高校生に会う。しかもその場限りでな

くて、ちゃんと名前をいただいて、その後も直接連絡する。名前をふまえた上での接触というのが、人数が少ないからやっているだけですけれど、学生募集の上での実際的な方針としてあります。

姉崎 大学としての説明会やオープンキャンパス、実際に出かけて行って高校に説明するなど、そういったこともされていらっしゃるんですか。

杉本 ええ。やり方としては、つい最近やったんですけど、通常の授業に高校生の方を同席してもらって、模擬授業じゃなくて通常のやつを体験するようなことを毎年1回はやっていますね。あまり校舎がきれいではないので(笑)、以前はあんまりオープンキャンパスはしなかったんです。ただ、今は高校側の進路指導の方が実際に行って来て、話を聞いて来い、体験して来いという指導が中心になっています。

あとは民間の業者主催の進学相談会とか、それから高校から呼ばれて、受験希望者その他を対象にお話しすることもあります。

姉崎 学生が実際に入ってきたときに、どうしてこの短大を選んだかというようなことをアンケートされていると思うのですが、反応はどんなものがありますか。

杉本 うちの進学動機は圧倒的に資格指向型です。手許に資料がないんですけれど、もう一つは大きな理由としては地元だというのはそれなりの比率だという記憶があります。

光本 他の地域から来ている学生の方はどういう指向で入学して来られたのでしょうか。

杉本 結構多いのが、幼児教育学科に男子学生が多かったことです。今だに公学の短期大学増えましたが、そんなになかったんですよね。それと幼稚園免許と保育士の資格がとれるのが一つの理由だと思います。その他も含めて、例えば偏差値的なことで札幌圏から来た学生もいたんだと思いますが、今はそういうこともありません。最終的に量でつかんではいませんが、資格をとりたいという学生。それから、道外から来るのは、北大とかもそうですが、北海道に来てみたいとか、そんなこともあります。

姉崎 教育大は5校ありますが、道外の比率が一番高いのが釧路校であったり、公立大も結構外からという志向が、北海道来るならどうせなら札幌ではなくて釧路というようなそういう形で来る学生もいたりということはおうかがいしたんですが、

その点では完全に“すみわけ”というか、地元に関心を置いている。

杉本 そうですね、地元です。まあただこれら先に向かっては議論があって、そういう言葉は避けているんですけれども。

姉崎 ということは、当然就職する場合も地元を希望する学生が多いということでしょうか。例えば幼稚園の資格をとって道内どこでも就職があれば行くというような学生がいるのか。その辺はいかがでしょうか。

岡崎 その辺は、一部の短期大学は別ですけど、ローカルな短期大学は、短期大学の所在地周辺から学生を集めるというのが圧倒的で、私どもの短期大学も、今釧路と説明しましたように、8割強が釧路市及び周辺ですから、当然うちを卒業して就職したいという学生はほとんど地元志向なわけです。比較的、学生の要望に応じて、地元にあるところは順調に就職が決まっております。それから、2割弱くらいは釧路根室管外の学生がおりますけれど、基本的には学生の出身地に戻して就職をかなえてやりたいということできております。これも比較的学生の要望に沿った形で就職実績があります。

私も、十勝地方管内、網走地方管内で50校くらいの高校を訪問しておりますけれど、特に遠隔地では、釧路へ行って本当に戻って就職しているんですか、という質問もあるんです。私も当然、何年もどういう学生が希望して、どういうところで就職したかという、そういう資料を全部持って、お見せしていますから、そういう面では先生方も信用していただいているんじゃないかなと思っています。

札幌圏はおそらく全道から短期大学も学生を集めていると思いますけれど、ローカルの短期大学はやはりその短期大学の設置されている周辺がどうしても多くなりますし、これから行かれます大谷さんもおそらくは十勝管内での学生募集が圧倒的に多いんじゃないかなと思います。

姉崎 地元から来られて地元に戻るということになると、先輩の人たちを追跡されていくと、地元での信頼というんでしょうか、そういう意味での伝統ができてくる面もあると思うんですけれど、その辺はある程度強みになっているかとおもいますが、いかがでしょうか。

西塔 おかげさまで、地元の幼稚園や民間保育施設



では必ず私どもの幼児教育学科の方に声をかけていただいています。釧路短大さんの卒業生しかとりませんというところも何カ所かあるんです。それでも内容的にはだいぶ厳しくなっているとは思っているんですけれど、やはり評価がされているという感じですね。それで、就職状況が他の地域よりいいかな、と思っています。

姉崎 資料を拝見すると数値が高いので、すごいなと思います。

西塔 地元の各幼稚園や保育園や施設に先輩方がある程度定着していますから、自分たちの後輩でおかしなのは、逆に私の方に電話が来て、とんでもない学生が来た、なんていう批判をされることもあります。反面、よくやっている学生に対しては継続的に短大の学生の評価になります。園長になる卒業生も出てきましたし、そういう伝統のようなものが、就職の励みや支えになっているように思います。そのようなつながりで、幼児教育学科は、ある程度は定員以上の人数も確保でき、あるいは就職もいいのかな、と思っています。

できれば、もっと広範囲な地域から、たくさんの学生がうちに入ってくればいいんですけど、最近は姉妹とか親類縁者の学生が入ってきていますので、このような関係の入学生にメリットのある制度の方も準備しています。

専門家像と教育ニーズ

姉崎 教育者なり幼児教育の専門家を養成するということ、こういう点は強いものをつくっているというような特色がありましたら。

西塔 それは“*We Feeling*”つまり、「我々意識」です。他愛もない感じかもしれませんが、先生と学生が、研究とか学問とか、四大流のそういう局面とは違ういろんな人間的なかわりみみたいなものがある。

ただ、だんだんと今風の学生が多くなってきました。ある意味で、こちらが心配したり親切心で言っていることが、ちょっとうざったいとか、そういう感じで拒否する学生もちょっと見えますね（笑）。

杉本 地域とのかかわりというところに関連するご質問だと思うんですが、短期大学が一つの生涯学習の機関として存在するわけですが、私どもの短大でも、以前から、社会人の入学に関しては金銭的には入学金を免除するという形で、社会人学生の受け入れをしております。だいたい毎年2人とか、3〜4人とか、そんな感じで、この間社会人入学が推移してきています。

これにはいくつか理由がありまして、率直には、若い人の人口が減る中で、これまでの伝統的な入学者といえますか、新規高卒者だけに限定していると、存続ができないと思いまして、ウイングを広げなきゃならないということになりました。よそでは外国人留学生とか、なんかいろいろそういった問題が出てますが、ここの地域特性を考えていえば、それはありえないだろうと思いまして、それから生涯学習という考え方も含めて、社会人の方々に的を絞って考えました。

そういうことで、実施は今年からですけど、「生涯学習奨励金」という制度を今年度から実施しています。社会人は、入学時で22歳以上の方ということしか定めてございませんので、例えば、卒業経験が必要だとかそういったこともございません。生涯学習奨励金は、ちょっとアバウトにいますけれど、20歳前半が年間10万円、20歳後半が20万円、30歳前半が30万円、30歳後半が40万円で、40歳からは50万という金額を、形の上では給付ですけど、実際は学納金から相殺しています。

これまで社会人で入学された方はどちらかというと20歳代の方が多かったんです。高校を出て働いて、そこになじめないとか、あるいは違う職につきたいとか、資格をプラスしたいとか、20歳代前半の方々が、本人は資格免許をとる気で、また違う職についていくという方が多かったと思います。そういう方もそれなりにいるんだろうと思いますけれど、さらにもうちょっと上の年齢の方も入学していただきたいということで、先ほど申し上げました、年齢別の給付金を採用するに至ってます。その結果、今年から実施ですけど、本

年度はこれまでの倍くらいの入学者がありましたし、入学される年齢も、20歳台の方も多くなりますけれど、30歳代・40歳代・50歳代と幅が広がってきています。

ただ、これから先、微妙な問題がありまして、先ほど申し上げたように、20歳代の方々は入学されて、免許・資格をとって再出発、就職をするんですが、簡単ではありませんけれど、まだ比較的それはやっています。ところが、もっと上の年齢の方になってくると、ちょっと勉強したいとか、就職を考えているわけではなくて資格の免許をとりたいという方たちですと問題はないんですけど、一定の年齢以上の方で、免許・資格をとって、それで仕事に就きたいということになると、どこまで私どもの短大がやっていけるのかということがあります。

それから、社会人入学に関しては、カリキュラム上、それについては全然配慮ができていないという現状があります。例えば、夜間、夕方開講するとか、そういったことができてなくて、結果としては現職をお持ちでない方、あるいは場合によっては現職をやめて入学されている方ということしかできていないんです。短期大学で卒業するだけですと、4年制大学の半分の62単位ですけど、教員免許とかありますと、2年間で100単位とかって数になりますので時間割も非常に密でございまして、現職をお持ちの方がそういう状態になるのは少し難しいかなと思っています。生涯学習機関としての役割というところとちょっと大袈裟ですけど、どういうふうな形でできるのかということが、この短大の中でも大きな課題であると思います。

ただ、短期大学は若い学生が多いですから、そこに社会経験のある社会人がいらっしゃるというのは、大学のつくり方としては非常によいと思います。学校ってちょっと変ですよ、ある年齢の人しかいないという異常な社会ですけども、そこに現実に存在する、男女、それから年齢のいろんな方がいることは、若い学生にも刺激になるし、私も、授業を担当していて勉強になることが多くて、大学としても、社会人入学については、ぜひとも何らかの形でサポートしていただきたいと思います。先ほど少し出たんですけど、長期履修制度を検討している最中です。修学2年を超えてることがあらかじめ保障される履修制度です。

光本 そういった方々の存在というのは、学生にしてみれば、いってみれば「大人」が勉強している姿を目の当たりにして、いろんな知的刺激を受けたりとか、よいきっかけになるんじゃないかと思えますけれど、具体的には、どういう層の方々が新しく入学されてきているのでしょうか。どういったお仕事の関係の方なのかとか、何か傾向的なことはあるのでしょうか。

杉本 例えば、助産婦さんで、妊婦さんの生活の指導とかするんですけど、栄養のこともちゃんと知らないといけないということで生活科学科の栄養士の方に来ている方がいます。そういうこれからの職業との連携の中でさらに学問を必要とする方が、一つの層としていらっしゃいます。

前職との関係でいうと、全く無関係の方もたくさんいます。一般事務職をやっていたりとか、バスのガイドさんをやっていたりとか。そういう方は、おそらく高校卒業の段階でいろんな思いがあって果たせなかったけれど、相当苦労もしたし、働く中でいろいろと分かったことかと思うんですけど、免許・資格をとってそういう職につきたいという、社会人になってからの針路変更などもあります。

それから、教養的なこともちゃんと勉強したいという、ある種の教養志向もあります。

姉崎 社会人の方が入ってこられるときに、教育効果、もちろん今までにない相互の学生同士のコミュニケーションや、教員の側も何かもう少し刺激を受けるってこともあるんですが、他面では難しさも出てまいりますよね。それで、例えば、語学であるとか、それから経験は非常にたくさん持っていたらっしゃるんですけど、系統的な学びをやるうとするときに困難があったりとか、そういったときの大学側の対応は何かなさっているんですか。個々の教員が努力するというのでしょうか。

杉本 例えば、社会人入学の方で不安に思われるのは、語学とか、私どものところではまだ体育が必修ですので、若い人についていけないということがあります。それから新しいものとしては、コンピューター系などがありまして、担当した教員がサポートしますが、具体的な対応として、特に組織的に対応することはやっていません。

中等教育、四大との連携

上田理 社会人の方が基礎教育から離れているとい

うこともあるかと思うんですが、一般学生も、最近、「学力低下」というものがすごく問題になっていると思います。そのための、いわゆるリメディアル教育というものは行われているのでしょうか。滝澤 やっていません。

坂田 社会人の場合でも一般学生の場合でも、いずれもそうだと思いますが、最初に社会人の方からお話いたしますと、特定の分野についてダメだということなんです。それについては、先ほどお話したようにシステムティックな対応をしていますが、教員個人が対応するということです。

一般学生の「学力低下」は世間一般にはあるといわれていますが、これは確かにあると思います。ただ、そんなにいわれているほどあるのかという疑問ももっています。特定の部分についての低下は仕方ありません。これはなぜかという、例えば、私は化学系統を担当しているんですが、高校で化学を習ってこない学生も相当にいるわけです。生物しか習っていない。それで本当にいろいろ大変なことになっていますが、これは「学力低下」というよりも、習ってこないんだから仕方がないんじゃないかと、習ってきて分からんというのじゃなくて、習ってこないんだから分からないのは当たり前ということで、やはり始まる前に数時間の補習をしなければならないという現状があります。困っているといえは困っていますが。

上田理 今の質問と関連して、こちらに高校が、附属高校という位置づけではないかもしれないのですが、隣接しているということで、高校から短大に進学する方がどれぐらいいるのかということ、短大から四年制への編入制度が各大学でとられていますけれど、それがどれぐらいあるかということ、あと先ほど就職率が高いという印象を受けたんですが、それが卒業生全体に対しての就職率なのか、それとも就職希望者の部分なのか、教えていただければと思います。

杉本 この建物の向こう側が緑ヶ岡高校なんです。完全にくっついておりまして、以前附属高校でしたが今は附属高校という扱いではございません。しかし、入試においては緑ヶ岡高校とは特別な推薦制度協定を結んでいます。

入学者は年によって非常にばらつきがありまして、今年は10名、緑ヶ岡高校出身の学生を受け入れましたけれど、その前は、さかのぼっていきますと4とか7とか8とかという形で、一般の附

属高校というかたちでイメージされますと、人数は少なく感じますね。おそらく帯広大谷さんに関しまして、あそこは30人くらいは来ていますので、人数から行くと同じ学校法人ですけれど数は少ないです。

高尾 就職率につきましては、就職希望者に対しての率です。が、ほとんど100%、年度によって違いますけれど、ほとんど学生数イコール就職希望者数で、95~6%希望者です。その中での就職率です。それから進路につきましては、ここ1、2年、進学者が出てまいりました。去年は教育大学の方に1人。今年はいません。あと専門学校の方で資格をとるために、介護福祉士に進むというのがここ1、2年増えてまいりました。

光本 編入学を希望する学生に対しては、特に何かされていますか。

高尾 特に指導はしていないんですけど、先ほど杉本先生のご指摘がありましたが、少人数のよい面ということで、ゼミ単位の教育の場の中でどうするかという感じです。就職についても希望はとります。その中で進学という学生がいます。今年は2人ほどいますけれど、それはゼミの先生と話し合っていたくということで進めております。

姉崎 特定の大学と協定を結ぶという形は…

高尾 そういふのはありませんね。

滝澤 進学で、四年制の大学に入ったのは、私の知っている限りでは、6年前の卒業生で北星学園に入った人と、去年、教育大釧路校にはいった人と、どちらも幼児教育学科の学生です。その2人に関しては、受験指導は、ゼミの担当教員が個別にやっています。6年前の学生も、僕のゼミで英語の指導を行いました。そんな調子で個別対応でやっているわけです。進学希望者はあまり多くないです。

それから、就職の率に関して、幼児教育学科のグラフを見ると100%ということになっていますけれど、実際は、保育園の40%と書いてある中身はほとんどは臨時採用です。正規職員の採用は、片手でも指が余るくらいです。幼稚園は幼稚園で、釧路は私立の幼稚園が多くて、なおかつ過当競争気味なものですから、若い人をどんどん使い捨てる傾向がありまして、卒業生が行くには行くんですけど、行った後長続きしないというところも中にはあります。全部が全部そうではないんですけども。数字がよいからといって喜んでばかり

いられないという、そういう気はしています。

光本 就職率でいいますと、幼児教育学科の方は市場との対応関係が非常に明確かと思いますが、生活科学科の方は必ずしもそうでなくて、就職先も多様ですけれども、短大はどこでも、生活科学科を置いているところは軒並み就職率が近年低下してきていると思うのですが、それに比べると釧路短大の生活科学科は就職率が高いように思うんですが、何か特別なケアとか対策とか、あるいは市場開拓の努力とか、そういうことはされているのでしょうか。

高尾 やはり地域にお願いするということになるかと思いますが、この「金融・保険」という関係ですと、例年、“取引”していただいております(笑)、そういうところでは採用のあるところに採用していただけるという感じです。それから職業安定所と中小企業家同友会とか商工会議所等との連携も密にしまして、ぜひという関係で確保しております。あと図書館のことにきましても、新しい分野ですよ、その辺でこれらは先ほどもお話ありましたが郡部の方で割と嘱託というような感じで採用いただいているところもあります。それから、公務員というのはほとんどが臨時採用になっております。卒業安定所の新卒者コーナーなどで働きかけをしていただいております。

姉崎 食物栄養専攻の「医療」というのはどのような分野ですか。

高尾 医療事務です。

標茶町との生涯学習提携

姉崎 生涯教育センターのことについておうかがいしたいと思います。ここは10周年ということで、これまでの10年の流れ、標茶町との協力関係や運営体制、大学だけではないと思いますので、その辺の予算のことなどを、それからこの間やられてきた成果についておうかがいできたらと思います。

鳥居 標茶町との提携関係を中心にお話したいと思います。ご承知の通り、各自治体が教育委員会社会教育課を中心に生涯学習推進政策というものをすすめております。ところが教育委員会が独自に生涯学習を進めようしますと、各自治体とも講師が不足して困っているということで、何とか講師の派遣について協力してほしいと、そういう申し入れがありました。

これはもちろん地域の生涯学習を進める上で困っている一つのことというふうには思いますが、私その話を最初に受けましたときには、単に講師の派遣であれば出前講座をやればいいのか、というようなことではないようにしたいとお話いたしました。それで、教育委員会にお話をいたしまして、できれば標茶町と事業を継続してやりたいということで了解を得まして、それで標茶町との間に提携を結びました。こういった出発点です。

標茶町というところは、当初、昭和 63 年頃にこの話ができたときに人口 1 万 5 千人以上あったところですが、だんだん減っておりまして、だいたい 1 万人切っているところです。それから町域でいいますと、これは非常に広いところでございまして、道内で言えば 6 番目の広さであります。もちろん管内では 1 番です。そういうところありますと、今申し上げたように現在 9 千人ちょっとしかおりません、非常に人口が減っている、そして町域が広いということのために、各部落が散在しているということになります。現在、部落の数が 23 あります。小さな部落もありますけど、なんとなくまとまった部落というのは 23 部落もありまして、そこで仕事をしている人たちのほとんどが農業と酪農というのが標茶町の実態なのであります。

釧路市から 50 km しか離れておりませんので、私どもが出向いて何かをやるという点ではそれほど困難な部分ではないんですけれども、境域が非常に広いということと部落の数が多いため、市街地で何かをやりましても、部落の人たちがそこに集まるのは非常に困難です。特にその職業が酪農だということは、生き物を扱っていますからいつでも時間があれば出てこれるという状態ではありません。そういうことがあるために、そういう地域に生涯学習を進めるためには在宅学習の方法でしかないのではないかと考えたんです。在宅学習の方式をとろうと。ということで標茶町との話し合いをしました。

在宅学習ということになりますと、テキストを大学側でつくって、それを各受講者が自宅で学習活動をする。学習活動しながら、月に 1 回か 2 回くらい、テキストをつくらせた大学教員がそこに出向いて、そのテキストの内容について、在宅学習の中身についていろいろ相談を受けるという形

の学習活動を展開した方がいいのではないかとということで始めたのがいくつかの講座なんです。随分たくさんの講座がこの中にありますけれど、10 いくつかの講座を開設しましたが、それらはほとんど全部がテキストをつくっている。テキストをつくりまして、一回は本町、つまり市街地で講座をいたしまして、あとは自宅に持って帰ってそれぞれの自宅で学習活動を展開していくという仕方をやったわけです。おかげさまで、標茶町では私どもが作り出したテキストはおそらく標茶町の事典の一つになるんじゃないかなと思うくらいいろいろなものを手がけました。

ただ、失敗したなと思うことが一つあります。それは、在宅学習の方法をとったのはいいんですけれども、やっぱり地域社会の実態について十分把握していなかったという点です。もちろん我々も何度か地域社会の実態調査をしました。それもまとめてあるんですが、どうも実態について十分に我々は把握できなかったという面があります。

それからもう一つは、地域の自治体では教育委員会が窓口になるわけですが、教育委員会も含めまして、自治体の中で人事の異動が非常に激しくて、なかなか人事が定着しない。大学側との関係も異動が激しいために非常に変則的で、何度も同じことを繰り返さなければならない。交渉や何やらです。そういう一面がありまして、これはどういうふうにして解決していったらいいのかと今でもまだ考えているところです。

したがって、標茶町との提携に関しては 10 年間やってきまして、反省することばかりが多いんですけれども、スクーリングということも考えまして、テキストをつくらせた教員が部落に出向いて、そこで地元の人たちとひざをつき合わせて問題点をいろいろ話し合うということは何回かやろうとしたんですけれど、そこが地域の実態にそぐわないというか、なかなかこちらが考えるようには集まらない。そういうこともありまして、結局このスクーリングということは今ちょっと中途半端になって止まっているわけです。これを何とか改革しなければならないと思っているわけですが、非常に難しいところだ今思っております。

それ以外の事業につきましては、標茶町につきましては現在もテキスト作成中でありまして、それはそれとして展開していきます。

あと釧路市内については、釧路市民の生涯学習



の展開について考えておりまして、資料の中に釧路短期大学生涯学習センターの現在の活動というところがありますが、そこに平成14年、今年度の授業内容を掲げております。一つは「道東文化塾」の開設ということで、これは7回の講座を開設いたしまして、一昨日、第1回目の講座を終わりました。これからあと6回やるわけです。

それからリカレント教育を行っていきまして、図書館司書、司書教諭のリカレント教育を、これから幼児教育学科の方や生活科学学科の方をお願いして、それぞれリカレントしてもらおうというふうにしていきたいというふうに思っております。

それから講演会ですが、今年は「地域経済」ということで、経済学の先生に講演をお願いしています。昨年は「イギリスの歴史・文化」に関する講演会を、市内のホテルあるいは図書館で開設しております。それからパソコン講座、これは毎年やっているんですが、今年も11月から12月まで実施します。

標茶町との連携事業については、そこに書いてある通り、標茶町の自然、自然の中の動物について、先ほども申し上げました通りテキスト作成中であります。それから、「子育て講座」というのは、かつて標茶町との提携の中に第1講座としてとりあげたのが「子どもの発達段階と親のつとめ」という講座名で、これはずいぶん長くテキストをつくっていた講座です。向こうの現場に出向きまして、講座担当と膝を突き合わせながら話し合いをやったんですが、これを今度「子育て講座」とあらためて、新しい講座を発足しまして、その第2回目になりますが、幼児の食事のしつけ、これも今テキスト作成中でありまして、これも今年10月か11月中旬に講座を開ければと思っております。

それから予算ですが、これは本学の生涯教育セ

ンターの予算であります。平成12年度が158万円、平成13年度が145万8千円、それから平成14年度、今年度であります。213万6千円。それが大学が計上している生涯教育の予算となっております。同じように標茶町で負担すべき性質のものは標茶町が負担している、そういうふうに予算の配分は行っております。

運営は、標茶町の教育委員会の中に生涯教育委員会というのを別につくっておりまして、社会教育課が中心になって関係の職員で構成されておりまして、この生涯教育委員会と私どもの大学の生涯教育委員会が年に1~2回、定期的に打ち合わせをしまして、立案あるいは実施に関する協議をもっております。大学の中には生涯教育委員会をつくっておりまして、これが現在7名の教員です。これが標茶町との提携に関する生涯教育事業の進め方であります。

なお、「今後の展開」というふうに書いてありましたが、基本的には従来からの事業を継続して展開していくことになるんだろうと思うんですが、生涯学習の事業はやはりこれは継続してやらなければだめだと私は思います。1回や2回単発で何かやったということでは大きな効果はありません。特に地域社会、地域に出向いて、地域で何かを展開する、繰り返し何かをやる必要があると思います。それだけ手のかかる仕事ですが、その点が一番大事だと思っております。繰り返してやるということは、繰り返してやるに足るだけのテキストなり資料を使わなければいけないということになるかと思えます。単なる1回限りの出前講座だけでは効果はないというふうに考えておりまして、これは標茶町にだけではなくて、釧路市内の市民に対する講座も同じような考え方だと私は思っております。

今後、予算の制約等いろいろありますけれども、現在までやってきたことを継続していくことについてはそれほど支障はないと思っています。

姉崎 いくつかもう少し説明をいただけたらと思うんですが、一つは鳥居先生もそうですが、生涯教育センター長というようになっていっていますが、釧路短大の中でのセンターの位置づけといいましょいか、大学によって、全学的なものとして位置づける場合と、一定の学部や学科と接続させてやる場合とがありますが、大学内の研究機能とセンターとの関係についてです。人員配置の問題もそうで

すけれども、その辺もうちょっと教えていただけたらと思います。

二つ目は、実験的な場を大学側として探しているらっしゃって、それでたまたま標茶町というのが選ばれたということを読んだように思うんですが、なぜ釧路でなかったか、ということです。

それから三つ目は、テキストを使われていいものをつくられているということですが、逆に、例えば短大の学生がそこに参加をして単位になるとか、そういう工夫などはこれまで考えたりしておられたかどうか、それから、今おっしゃったように単発型ではない継続性ということと言うと、受講した人との関係で参加型の内容をつくりながら、独自にこういう講座に参加された市民の方々が大学のある意味では支えでサポート役にもなっているという、そういうような努力なりがおありになるかどうか、その辺をちょっと教えていただけたらと思うんですが。

鳥居 生涯教育センターの位置づけにつきましては、全学の中で展開しております。学長による生涯教育委員の任命であるとか、生涯教育に関係するいろいろな事業の展開については計画的に承認されて、全学が協力していかなければという位置づけになっています。ですから、大学の中ですと幼児教育科と生活科学科がありますが、それぞれの先生方がもっている教科について、教科を土台にしたテキストをつくるような場合については、これは計画的に承認された仕事として作成していただくという形をとっております。

それから、なぜ標茶町と提携して釧路市とやらなかったのかということをお話します。これは私、地域社会の中で、二つ考えたんです。標茶町は農業中心、農業社会です。もう一つは漁業社会をというふうに思っております、つまり漁業を中心とした社会となりますと同じ地域の中でかなり違った様相を呈してくる。例えば厚岸町とか白糠町とかです。漁業を中心とした町の住民に対する大学の生涯学習はどう進めるかということになりますと、それぞれの地域社会で全く違う要素がある。これは研究対象の問題もありまして、生涯学習を進める上で異なった地域社会を理解して、大学がどういった展開をすることが可能かというような、先生方にとっても研究対象になるかもしれないことだと考えました。そういうことからよその漁業を中心とした町村にちょっと声をか

けてみたんですが乗ってこなかった。標茶の方が先に乗ってきた、そんな経過があるものですから、標茶町はわりあいスムーズに展開されていったんですが、よその町村は難しかったということがあります。

今考えてみますと、標茶町だけでこれだけ事業を展開して何かをやりますと、うちの学校としてはお手上げみたいです。これ以上広げたら大変なことになることが後で分かりまして、標茶町だけ何とか大事にしていかなければと思っております。

ただ、釧路市民に対する生涯学習は、市の教育委員会とか各機関がいろいろ展開しており、民間でもやってくれていますので、これはまた特別な、変わった生涯学習の仕事をどう展開するかというのを描かなきゃならないんです。そんなことで今年から文化塾みたいなものを新たに発足させたいんですけれども、何か特色のある生涯学習のやり方として、そういうようなことを考えているんです。

学園の教育の発展、体系化

姉崎 各地の短期大学では、専攻科をつくったりとか、あるいは科目等履修生を考えたりして、学位授与機構等と連携学士を出すなどいろんな模索をやっていらっしゃると思うんですけれども、学校法人として情報専門学校も持っていられたいので、総合的に見た場合に、短大として今の段階として考えていらっしゃることを最後にお聞きしたいと思うんですが。

坂田 まだ具体的にどうこうということはないんですけれども、少子化の問題があるので、何らかのことはやらなければと思っています。どうしてもこちらが考えていることは財政的な問題が伴いますので、その辺の調整も必要かと思えます。

現在は、学科別の編成をどうするかというような問題を検討しているところです。先ほどもお話ししたように、新しい学科をつくるというのは非常に困難を伴うということもありますので、一応考えの中に入っているんですが、かなり実現性としては低いんじゃないのかなと思っています。そうしますとどういう方向が今考えられるかといいますと、先ほど姉崎先生がおっしゃいましたが、長期履修であるとか学科の編成の問題であるとか、資格等の見直し、こういったようなものを中心になっていくのかなと考えている段階です。



岡崎 私どものところは入学定員が100人で、中をいいますと、幼児教育学科が50人、生活科学科の中に専攻2つで20人・30人という入学定員なんですけれど、専攻の方も学科とみなされますから、教員の配置も最低100人なんで、幼児教育も100人ということですから、20人でも100人、30人でも100人という教員の配置が行われております。

持っている専攻にしがりがございまして、言葉は悪いですけど、非常に効率の悪い学科専攻の配置であります。ですから、そういうのを何とかできないだろうかというような思いもありますし、一方では新しい学科を立ち上げることはできないのかな、というような思いも現実問題としてあります。ただ、新しい学科を立ち上げるということになりますと、教員も設備も整えなきゃならない。設備をある程度整え、あるいは教員組織をつくり変える必要があります。そうしますと、相当な設備投資、あるいは財政改革が必要になりますから、いろいろな方法は案としては現段階でもありますが、やっぱり最終的には財政等の問題、それから教員組織をどうつくり上げるかということになります。ローカルな町ですと、教員を確保するといってもなかなか教員を確保すること自体が難しいという実態が多分にありますので、今のところは2学科で2専攻で行くのか、これをなんか変えるのか、あるいは新しい学科を立ち上げるというのはかなり財政的には難しいのかなという感じがします。

ただ、いずれにしても、だいたい9月いっぱいくらいまでには結論を出していかなければならないということで、自己点検・評価の活動で学園が忙しかったものですから昨年の12月から打ち合

わせ会議が中断されていますが、試験期間が終わってから専門委員会を再開したい、その辺のツメの話をしていきたいというふうに今なっています。

短期大学の学科の分野はだいたい決められておりまして、決められた範囲以外からの学科設立は非常に難しくなっています。おそらく今、短期大学は、社会福祉の関係ですとか医療福祉の関係ですとか介護ですとか、それから看護ですとか、そういうもののところは比較的できる可能性があります。ただ、どの分野にしましても相当のお金がかかります。また、たとえ財政的なことがなんとかなったとしても、教員の確保となりますとそちらの方が非常に難しいということがあります。

光本 財政の問題を考えるにあたりまして、平成5年の将来構想委員会の「将来構想について」という文書を拝見したんですけど、ここでは、道内にあります稚内北星ですとか帯広大谷ですとか拓殖ですとか、短大がそれぞれ自治体から寄付を受けているようなことが書かれていて、そういった観点から釧路市との関係も今後考えていくというようなこともおそらく議論されているんじゃないかと思うんですけど。それについてはどうでしょうか。

岡崎 この短期大学が地元に対してどれだけの貢献をしているかを、行政には適正に評価してもらいたいということがあります。

まず一点は、ただでさえ若い人たちが流出しています。ところが、入試委員長がお話ししましたけれど、私どもの短期大学の8割方の学生は地元の学生なんです。それは圧倒的に女子学生が多くて、そして卒業してどうするかというと、圧倒的に地元就職するわけです。そしてまた就職して何年かされると、また子どもさんが来る。そういう面では、地元に対する貢献というのは、それなりの評価をしていただいてもいいんじゃないのかなと思いますし、最近、これから何かを展開するときには、やはり市の財政も大変でしょうけども、そのところをきちんと評価をいただいて、それなりの支援をお願いする、そういう姿勢が学校法人としては正当でないのかなという気持ちでいます。

ただ、今の理事長、それから前の理事長も、できるだけ行政の方に、第三者の方に財政的なお願いをしたくない、そういうことでやってきたところですから、なかなかうまく整理できるか、とに

かくできるものは自前でやる、ということで来た経緯がありますから。

滝ヶ平 先ほどの生涯教育センターのところで、さまざまな講座が書かれていたんですが、それに対して講座終了後に参加者からアンケートなど取ったりして講座の内容の検討なりを行ったりしていますか。

鳥居 講座が終わった後でアンケートをやっております。次の講座を継続する場合の参考にしかありませんけれども、そのアンケートの中身には、テーマ自体が非常に難しいというような意見のものもありますし、それから面白かったというのもありますし、なかなか全体として次にアンケートをどう反映させるかというのは難しいです。

滝ヶ平 先ほどいただきました『2000 年度学生生活実態調査（学生対象）中間報告』の 59 頁に、学生の授業アンケートがあるんですが、それに対して、どのような工夫をし、どのように授業に活かされているかをお聞きしたいんですが。

芳賀 これは、各学期ごとに、非常勤の教員も含めまして全教員で、全学生対象のアンケートを一人の教員が 2 科目くらい挙げて行いました。授業のアンケートの様式もございますので見ていただきたいと思います。

これは、各教員の勤務評定という形では絶対に使用しないというのが原則で、全体評価という形での集計をとり、各教員の個別評価は行わないという形で、全体結果を大学でまとめて自己点検・評価報告書の方で報告するという形をとりました。各教員につきましては、アンケート用紙をすべていったん教務の方で集計して、そのまま教員にお返しする形で、それをまた先生方が個別にご覧になった上で次の授業に活かしていくようにしています。大学として全体的に組織的に活かすという方向ではなく、個別の先生方が自分の次の授業に活かすという方向でやってきました。

金澤 学生のサークル活動などで地域社会に交流しているものがあれば教えてもらいたいんですが。

芳賀 短期大学ですから、先ほど単位の事が出ていましたが、最低卒業が 62 単位ですけれども、資格免許をとる多い学生では 128 単位くらいとった学生がいます。それで時間割が 5 限で終わると 17 時 40 分。それからサークルというと、なかなかしづらいです。それから今の学生はアルバイトもこなしたりしていますので、なかなかサークルと

いうのはできにくいんです。

その中でも、エアロビサークルが、交流まで行かないと思うんですけど、地域でイベントがあるときに参加しています。それから Σ ソサイエティというサークルがありますが、これは国際ソロプチミスト釧路のご指導のもと、ボランティア活動をしています。施設へ行って老人の話し相手になったり、市内に花壇をつくり手入れに行ったり、そういった交流を、時間がとれない中でもしています。他に学生が個人的にボランティア活動に参加したりとか、教育大のサークルに加わっている者も何人かいます。

姉崎 それでは終わります。長時間どうもありがとうございました。